

【広報文化財コラム】「一宮の歴史特集」⑨

平成29年8月号



高石真五郎は、明治11年（1878）、千葉県鶴舞村（現市原市）に生まれました。慶應義塾大学卒業後、明治34年（1901）に大阪毎日新聞社に外国通信部員として入社、のちに特派員として海外で活動しました。

イギリスやロシアで活動し、オランダのハーグに派遣されている時の明治40年（1907）に発生した「ハーグ密使事件」（大韓帝国が第二次日韓協約の無効を平和会議で訴えようとした事件）をスクープしました。この時の密使と唯一面会し取材した日本人記者が高石だったといえます。

その後が同社政治部長などを経て昭和13年（1938）に毎日新聞社の会長に就任します（昭和21年に全ての職を辞職）。戦後の公職追放によって、毎日新聞社の運営からは離れることとなります。

一宮との関わりは、昭和19年（1944）に一宮川沿いに別荘を購入したことに始まります。「一宮町史」（1964年）の彼のエッセイによれ

ば、戦争が激化する中、別荘として購入したはずが、一宮の「別宅」は事実上の疎開地となり、そこから東京の毎日新聞社に通勤していたといわれています。空襲で東京・大阪の住居が焼失してしまつたため、唯一残つた一宮の家で20年近くを過ごしました。

また、高石は国際オリンピック委員会（IOC）の委員を務めており、病床の中で、昭和39年（1964）の東京オリンピック、冬季の札幌オリンピック（昭和47年）の周知に尽力しました。

国際的に活躍した高石は晩年は東京に住し、昭和42年（1967）に88歳で亡くなりました。現在、一宮の彼の別荘跡地には石碑が建てられています。



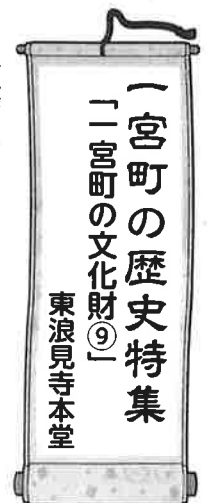
▲高石真五郎別荘跡地石碑（一宮 4493 付近）

【問合せ】

教育課

☎(42)1416

平成29年9月号



軍荼利山の麓から、約200段の階段を登ると、仁王門と仁王像が参拝者を出迎えます。そこからさらに先に進んだところにあるのが、今回ご紹介する町指定有形文化財「東浪見寺本堂」です。

東浪見寺は、聖徳太子が軍荼利夜叉明王の像を彫刻して安置したのが開基と伝わり、大同年間（806~810）に行基（668~749）が東国を訪れた際に再刻したものが現在の本尊だと伝わっています。

江戸時代、九十九里沿岸で地曳網漁が盛んに行なわれるようになると、漁業と結びついた信仰として江戸や三浦半島、奥州方面など遠方からの寄進者が多くなり、隆盛をきわめました。

明治以前は「軍荼利堂」と呼ばれ、神仏分離令のため、明治2年（1869）に「東大社」と改称、昭和16年（1941）に現在の軍荼利山東浪見寺となりました。

本堂の向拝（屋根の中央の張りだし部分）の彫刻や建物内部の組物は織

細に仕上げられています。建立年代は向拝正面の扁額に「享保八年癸卯年五月廿八日」（1723年）の刻印があることから、同時代かそれ以前の建築とみられます。

毎年1月28日に行われている軍荼利祭りでは、本尊の「木造軍荼利明王立像」（県指定有形文化財）が公開されます。午前・午後の2回護摩焚きが行われ、午後の護摩焚きの前には天狗が登場します。



▲東浪見寺本堂

【問合せ】

教育課

☎(42)1416